| | |
|---|---|
| 氏　　名 | 金　基永 |
| 学 位 の 種 類 | 博士（美術） |
| 学 位 記 番 号 | 第 77 号 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第 4 条第 1 項該当 |
| 論　文　題　目 | 「雑感」と「反芻」の創造世界<br>−坐禅修行を中心とした美的感覚について− |
| 審　査　委　員 | 主査　教　授　中ハシ克シゲ<br>准教授　礪波　恵昭<br>講　師　金氏　徹平<br>教　授　中原　浩大<br>蓮沼　良直(臨済宗南禅寺派宗務総長) |

# 論 文 の 要 旨

本論文は約 3 年間の坐禅体験と作品制作を中心に進行された。本論文は一つの概念を決め、それを演繹的、帰納的方法で分析して自分が設定した概念の妥当性を証明する方式の論文ではない。坐禅修行をもとに変化していく自分を発見し、ある予測不可能な結果が導き出されるかを考察する経験過程としての論文である。したがって特定の専門書物や思想論集を中心に研究を行うというよりは本人の経験過程をありのまま記録した坐禅日記と制作日記を中心に展開した。

本論文の第 1 章は本研究者の成長背景をもとに他人の目に対する定義と坐禅修行以前の作品について論じた。その結果、坐禅体験以前の作品は自分だけの経験や感情、意志よりは客観的で分析的な思考を中心に他人を説得させるための作品だったという結論にたどり着いた。また、このような考え方は観念の對象と作品を同一化、客観化させ、ある意味ではすでに作られている概念だけを選んで再構成することに過ぎないということを究めた。

本論文の第 2 章では坐禅体験と作品制作の過程から経験した事物と空間について論じた。また、禅をモチーフとした作家の作品についても調査した。その結果、対象は理性的思考を通じて作品の構成要素として認識することではなく感覚的に知覚されることだという結論を得た。この際の感覚は神経系統の刺激と反応関係の感触でもなく従来のいくつかの哲学者たちが述べている、ある純粋な次元での単一な感覚(超感覚)でもないことを話した。

本論文の第 3 章は、第 2 章で取り上げた感覚を美的知覚の問題として扱い、雑感という用語を用いて論じた。雑感とは、雑という文字が象徴するように対象、外部、私が総体的に混在された意識を理性の分析、推論ではない感覚として還元させ、発現することを意味する。雑感は本論文の中で最

も重要となる部分であるため、1と2で分けて展開した。

雑感 1 では、選択されたオブジェ(発見された事物)らがある状況へ展開される過程を通じて一つの知覚が他の知覚(対象)へ移動する際に生じる一種の衝撃のようなことが雑感を発生させていることを述べた。このような意識構造に対しては反芻動物が一度食べたものを再び吐き出す時、以前に食べていたものとは異なる非同一なものになる反芻の過程に当てはめて説明した。つまり、一つの経験が感覚になり、他の経験に影響を与えて雑感となり、その雑感は更に別の経験に影響を与える波形の時間性を反芻として論じたのである。

雑感 2 では反芻の時間性と身体性を中心に作品とは観念から展開されたとしても身体感覚と現場性を通じて既に作られたこと(観念)から分離されていくことに密着しなければならないと主張した。したがって雑感として提示された本研究者の作品は対象と現場、身体感覚が不可視的に浸透、融合、衝突する反芻の過程の中で現れる現成物であることを論じた。

最後に坐禅修行を中心に制作された本研究者の作品から禅に対する固定された意味や内容(特に理論的背景と関連されたこと)が見えない理由について″主体的媒介者″の観点から語った。 主体的媒介とは表現したい対象を経験によって生成された自身の感覚(雑感)に還元させて観念と非同一した実体に発現させることを意味する。つまり、対象(坐禅修行)と外部(現場)、私の身体感覚がお互いに影響を交わす反芻の過程を経て観念から脱した非同一性の作品(雑感)が成り立つことを論じた。

# 審 査 結 果 の 要 旨

キム・キヨン（金基永）が韓国で受けたアカデミックな美術教育は、大正期の日本を由来としながらも韓国特有の風土の中での評価基準が形成されたものであった。韓国の美術大学において技術習得のレベルの高さに自負心を持つキムは、以前より西田哲学に惹かれていたこともあり自己の美的意識の補強という意味で本学博士課程に入学した。当初、西田から導かれる韓国の禅スタイルの作家たちのように禅に関連する造形言語やそれを裏付ける関連作家たちの作品そして書籍からの分析的な研究を試みようとしたが、研究が進むにつれ禅の直接体験から導かれる考察へと傾斜していった。日々の坐禅日記そして制作の日記から自分の内面に起こる変化と制作に向かう心の持ち方を制作の目標と結びつけるようになった。こうした作品と制作過程を不可分にして研究を進めようとする点は斬新で、本研究の骨格を成している。ここではキムの論文の論旨と同時平行して行われた作品制作を要約して紹介し、その推移を述べたい。キムの論文は３章に分かれているが、特に３章の美的知覚の問題が本論文の核心部分であるので、そこに焦点を当てて紹介する。

美的知覚に関して、キムは雑感と反芻という新しい概念を提出し、大半はその言葉の説明に充てられ、またそれに呼応し制作された作品群がある。雑感は、小さなエピソードを添えて説明している。それは坐禅が終わった後の作務である。座禅が終わって、苔むした庭の雑草を引くときは楽しさを覚えるが、それは苔の中から雑草が自ら現れだすからだと言う。通常であれば、同じ色をして苔と同じほどの背丈の小さな雑草は見分けがつかない。事物を知性的概念で分ける以前の状態の感覚は内容と意味とが混在していて、理性、知性と分けられているのではなく、むしろ感覚に還元されていることを示している。哲学者はその現象を純粋主体と呼んだり純粋精神とかいうのであるが、キムは純粋というよりは、いろいろな雑多なものだとし、雑感という名が相応しいと主張する。坐禅を組むとき現れる雑念は払っても、払っても本来的にその源泉が途絶えることはない。雑念は流すように思考の方向を変えるようにするだけである。このことは次々にやってくる対象を分析するのではなく、此処でしなければならないことは対象を眺めている自分自身であることにキムは気付くのである。

一方、雑感は瞬間的なもので持続せず、前もって経験した（先経験）が再び新しい雑感として現れることを反芻とキムは定義する。牛が一度食べたものを反芻した時、前の物と同じでありながら非同一の何かになるように対象と現場（身体）がお互いに影響を与える反芻の過程を経ることで、知性の同一作用から抜け出して非同一のものが生まれることを論じ、先経験がもたらす影響を新しい雑感で捉え直すのである。人は本来このように暮らしているのだとキムは主張し、普遍的な人間のあり方を示そうとした。こうした思索に先立って制作があり、そのまた先に坐禅がある。坐禅修行はキムを主体的な自我を発見させ、固定化された禅のイメージから彼を救い出すことになった。いわゆる禅的と呼ばれる作品は、禅の知識や概念、思想などを既成の禅のイメージに写すだけの媒介者の仕事となりがちであるが、キムが作リ出す作品はそれとは違って禅の内容や意味を観念的に伝えることはしない。本審査に展示された椅子をノミで極限まで削りとった作品は、かろうじてそれが椅子としての名のつくモノとして、概念と存在の在り処としての境界線を端的示していて興味深く説得力のある作品となっている。また横たわった犬をモチーフに工作台の上に展開された作品は、もはや犬とは呼べず、台に突き刺さった垂直の板と床に置かれた板とがお互いに呼応して新しい空間を作っている。これらはキムの言う瞬間に生まれた雑感を基に、

展示場所としての現場に合わせて融通無碍に構成されたものである。ひとたび何かの条件が変わると、たちまち作品の形状や要素が変化をするであろう柔軟性が、彼の言うところの雑感的制作態度なのである。
キムの作品すべてに渡って言い得ることであるが、論文と実制作は不可分なほど密接な関係性を保ち、その整合性は明白で一つの特徴とも言えるほどである。内証の細部においては、幾つか主観的になる傾向も見受けられたが、メルロポンティ、西田幾多郎、ベルグソン、ウイリアム・ジェームスなど、先行する哲学者の論文を研究し、比較しながらの論証は客観性を持とうとしている。特に本審査に迫る２ヶ月間の作品の進展の加速度は注目させ、審査に関わった全員が作品の質的な飛躍を認めた。審査の中で、一度距離を置いた筈の彫刻的思考が最近作の中にあり、彫刻的修辞がその修辞ゆえに議論となった。しかし彫刻は先経験としての反芻としての自然な行いとして考えられることから、新しい制作思考の領域を獲得したとして、博士認定の要件を満たしているとし、審査員全員の意見が一致した。